令和６年度　九州国際大学付属高等学校

国　　語　入学試験問題

問題用紙　（１～22 ページ）　試験時間　（50 分）

注　意　事　項

１. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。

２. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。

３. 解答は、すべて解答用紙に記入すること。

４. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。

５. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。

６. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そう「書く」こと、「発信する」ことはもはや僕たちの日常の生活の一部だ。この四半世紀で、「読む」ことと「書く」ことのパワーバランスは大きく変化した。前世紀まで「読む」ことと「書く」ことでは前者が基礎で後者が応用だった。「読む」ことが当たり前の日常の行為で「書く」というのは非日常の特別な行為だった。そして（本などのまとまった文章を）「読む」ことのほうが特別な非日常になっている。これまで僕たちは「読む」ことの延長線上に「書く」ことを身につけてきた。しかし、これから社会に出る若い人々の多くはそうはならない。彼ら／彼女らの多くはおそらく「書く」ことに「読む」ことより[a]ナれている。現代の情報環境下に生きる人々は、読むことから書くことを覚えるのではなく、書くことから読むことを覚えるほうが自然なのだ。これは現代の人類が十分に「読む」訓練をしないままに、「書く」環境を手に入れてしまっていることを意味する。だが、かつてのように読むこと「から」書くというルートをたどることは、［　I　］難しい。それは僕たちの生きているこの世界の「流れ」に逆らうことなのだ。

ではどうするのか。現代において多くの人は日常的に、脊髄（せきずい）反射的に、たいした思慮も検証もなく「書いて」しまう。ならば「読む」ことと同時に「書く」ことを始めるしかない。いや、より正確には訓練の起点は「書く」ことになるはずだ。まずはプラットフォーム[注1]の促す①脊髄反射的な発信ではない良質な発信を動機づけ、その過程で「書く」ためには「読む」ことが必要であることを認識させる。そして「読む」訓練を経た上でもう一度「書く」ことへの挑戦を求める。「読む」ことではなく「書く」ことを起点にした往復運動を設計する必要があるのだ。

ではこの時代に求められているあたらしい「書く」「読む」力とは何か。［　II　］能力は高くないけれど、なにか社会に物を申したいという気持ちだけは強い人がいまインターネットで発言しようとするとき、彼／彼女はその問題そのものではなくタイムライン[注2]の潮目のほうを読んでしまう。そしてＹＥＳかＮＯか、どちらに加担すべきかだけを判断してしまう。

タイムラインの潮目を読むのは簡単だ。その問題そのもの、対象そのものに触れることもなく、多角的な検証も背景の調査も必要なくＹＥＳかＮＯかだけを判断すればよいのだから。しかし、具体的にその対象そのものを論じようとすると話はまったく変わってくる。そこには対象

を解体し、分析し、他の何かと関連付けて②化学反応を起こす能力が必要となる。

そして価値のある情報発信とは、ＹＥＳかＮＯかを述べるのではなく、こうしてその対象を「読む」ことで得られたものから、自分で問題を設定することだ。単にこれを叩く／褒めるのが評価経済的に自分に有利か、不利かを考えるのではなく、その対象の投げかけに答えることで、新しく問題を設定することだ。ある記事に出会ったときにその賛否どちらに、どれくらいの距離で加担するかを判断するのではなく、その記事からチャクⓑソウして自分の手であたらしく問いを設定し、世界に存在する視点を増やすことだ。既に存在している問題の、それも既に示されている選択肢（大抵の場合それは二者択一である）に答えを出すのではなく、あらたな問いを生むことこそが、世界を豊かにする発信だ。

「書く」ことと「読む」ことを往復することの意味はここにある。単に「書く」ことだけを覚えてしまった人は、与えられた問いに答えることしかできない。しかし対象をある態度で「読み」、そこから得られたものを「書く」ことで人間はあたらしく問いを設定することができる。そうすることで、世界の見え方を変えることができる。

あらたな問いを生む発信は、③既に存在する価値への「共感」の外側にある。人々はインターネットである情報を与えられ、それに「共感」すると「いいね」する。このとき、その人の内面に変化は起きない。それがよいと予め思っていたからこそ「いいね」する。しかし問いを立てる発信は違う。国会を取り巻くデモ隊と、それを取り締まる機動隊のどちらに「共感」するかという回答を行う発信は世界を少しも変えはしない。しかしそこに人出を見込んでアンパン屋を出す人々の視点をⓒドウニュウすることで、あらたな問いが生まれる。④世界の見え方が変わるのだ。

こうした価値の転倒は、「共感」の「いいね」の外側にある。人間は「共感」したときではなく［　Ⅲ　］想像を超えたものに触れたときに価値転倒を起こす。そして世界の見え方が変わるのだ。

そして⑤価値転倒をもたらすのは「報道」の役目ではない。僕がスロージャーナリズム(注3)のように「報道」に主眼をおかない理由がここにある。事実を報じることは前提として必要だ。しかしそれだけでは足りない。僕たちはその事実に対してどのように接するのか。その距離感と侵入(注4)角度を変えるための言葉が必要なのだ。そして様々な距離と角度から対象を眺め、接することではじめて人間はその事物に対しあたらしい問いを設定することができるのだ。そう、その行為に僕はいま改めて「批評」という言葉を充てたい。「報道」が伝えることができるのは、ある事実の一側面だ。そして「批評」はその事実の一側面と、自己との関係性を考える行為だ。距離感と進入(注4)角度を試行錯誤し続ける行為だ。「報道」

は世界のどこかで生まれた「他人の物語」を伝える。報道を受信した人々はそれを解釈して「自分の物語」として再発信する。このとき与えられた問いにＹＥＳかＮＯか、０か１かをヒョウ[d]メイすることだけでは⑥世界は貧しくなる。このときあたらしく問いを立て直し「共感する／しない」という二者択一の外側に世界を広げるためには「批評」の言葉が必要なのだ。

「批評」とは自分以外の何かについての思考だ。それは小説や映画についてでも構わない。料理や家具についてでも構わない。それは、対象と自分との関係性を記述する行為だ。そこから生まれた思考で、世界の見え方を変える行為だ。⑦最初から想定している結論を確認して、考えることを放棄して安心する行為ではなく、考えることそのものを楽しむ行為だ。ニュースサイトのコメント欄やソーシャルブックマーク[注5]への投稿[注6]で大喜利のように閉じた村の中でポイントを稼ぐことで満たされるのではなく、よく読み、よく考えること、ときに迷い袋小路に佇む[たたず]ことそのものを楽しむ行為だ。

誰かが批評を書くとき、書かなくとも批評に触れて世界への接し方が変わるとき、それは紛れもなく自分が発信する自分の物語の発露になる。しかしそれはあくまで自分についての言葉ではない。⑧自分の物語でありながら自己幻想には直接結びつくことはない。何かについて書くこと（批評）は、自己幻想と自己の外側にある何か（世界）の関係性について言葉にすることだ。それは不可避に自己幻想の[e]ヒダイするこの時代に、より必要とされる言葉なのだ。

（宇野　常寛『遅いインターネット』から）

（注）
1　プラットフォーム ―― ＩＴの分野において、システムやサービスの土台や基礎となる環境のこと。
2　タイムライン ―― 発言が時系列で並んだ状態の表示画面のこと。
3　スロージャーナリズム ―― 情報が社会にとって価値のあるものかどうかを吟味し、時間をかけてニュースを掘り下げ、報道するスタイルのジャーナリズム。
4　侵入・進入 ―― 原文のまま。
5　ソーシャルブックマーク ―― 気に入ったＷＥＢサイトのオンライン上に保存できるだけでなく、不特定多数のユーザーと共有できるインターネット上のサービス。
6　大喜利 ―― 出されたお題に対して、面白い回答をして競い合うこと。

問一　二重傍線部ⓐ〜ⓔに相当する漢字を含むものを、次の各群の1〜4の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

ⓐ ナれ

1 新入生カンゲイ会の準備をする。
2 初志カンテツの精神でやり遂げる。
3 空気をジュンカンさせる。
4 手指消毒がシュウカンになる。

ⓑ チャクソウ

1 修学旅行のカンソウ文を書く。
2 フクソウを正して試験に臨む。
3 クラスマッチでソウゴウ優勝した。
4 コウソウビルが立ち並んでいる。

ⓒ ドウニュウ

1 正々ドウドウと勝負する。
2 部活動で後輩にシドウする。
3 周りの人にドウイを求める。
4 ドウヨウを口ずさむ。

ⓓ ヒョウメイ

1 持ち物に名前をメイキする。
2 絵画にカンメイをうける。
3 お化け屋敷でヒメイをあげる。
4 国連にカメイする。

ⓔ ヒダイ

1 台風のヒガイは甚大だ。
2 テレビを見て現実トウヒする。
3 有機ヒリョウで野菜を育てる。
4 試合が続いてヒロウがたまる。

問二　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

1　むしろ　　2　たとえば　　3　そして　　4　だから　　5　もはや

問三　本文には次の一文が抜けています。どの文の後に入りますか。直前の文の**最後の**五字を抜き出して答えなさい。

しかし現代では多くの人にとっては既にインターネットに文章を「書く」ことのほうが当たり前の日常になっている。

問四　傍線部①「脊髄反射的な発信」とありますが、それはどのような発信ですか。解答欄に合わせて本文から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五　傍線部②「化学反応を起こす能力」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　既成概念では新しい考えや価値観を生み出せなくなったため、インターネットに蓄積された多くの情報をそのつど取捨選択し、一般的な考えにまとめ上げること。

2　用意された単純な選択肢を一般的な固定観念で判断するのではなく、背景を理解し多角的な分析をしたうえで客観的に考察して新たな視点を生み出すこと。

3　ＳＮＳなどに書き込んで世界中の人に自分の意見を広く知ってもらい、同じような意見の人たちの賛同を集め、組織や権力を批評することで社会問題を解決すること。

4　タイムラインの潮目を読みさまざまな意見を分析したうえで、多角的な検証や背景の調査も行い少数派を援護することによって活発な議論の場を作り上げること。

問六　傍線部③「既に存在する価値への『共感』の外側」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　世の中で議論されている問題に対して、ＮＯをＹＥＳに変えるような意見から生まれる世界のこと。
2　世の中で議論されている問題に対して、ＹＥＳ／ＮＯを中和するような意見から生まれる世界のこと。
3　世の中で議論されている問題を、ＹＥＳではなくＮＯの視点から見る世界のこと。
4　世の中で議論されている問題を、ＹＥＳ／ＮＯではない全く別の視点から見る世界のこと。

問七　傍線部④「世界の見え方が変わる」とありますが、その具体例として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　希少な動物を保護する立場の人、風習として動物を捕獲して生計を立てている人々が論争を繰り広げていたところ、そのことがメディアで大きく取り上げられることとなり絶滅危惧種への人々の関心が広がった。
2　将来の夢を決める際、人間にしかできない仕事なのか、いずれは人工知能に奪われる仕事なのかを考えると不安になる。しかし、自給自足で生活する力があれば時代に流されることはないと気づいた。
3　生徒総会において、学校に通う生徒に制服が必要か必要ではないかと議論していたところ、どちらも一歩も譲らず結論が出なかったので、近隣の学校にアンケートを取りその結果を受けて決定することにした。
4　海外旅行に行く際、人気のある観光地に行くのか、まだ誰も知らないような秘境を開拓するのか迷うところだ。しかし、安全面を考えると多くの人が訪れる観光地の方が安心だから冒険はしないことにした。

問八　傍線部⑤「価値転倒をもたらすのは『報道』の役目ではない」とありますが、なぜ「報道」では「価値転倒」が起きないのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　価値転倒させるためには、真偽によらず流れてきた情報と自己との距離感をはかる必要があるが、「報道」の真実性とは無関係だから。
2　価値転倒させるためには、「自分の物語」を発信することは重要であるが、「報道」から飛び込んでくる「他人の物語」は必要ないから。
3　価値転倒させるためには、事実と自己との関係性をはかる必要があるが、「報道」では事実の一側面を伝えることしかできないから。
4　価値転倒させるためには、個人の主観に基づいて対象を眺めることが重要であるが、「報道」はあくまで対象を客観視したものだから。

問九　傍線部⑥「世界は貧しくなる」とありますが、それはどうなることですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　自分で思考せず、既成の考えや他者の用意した選択肢を選ぶだけというようなことばかりしていると、自分自身のものの見方が多様性を失ってしまうということ。
2　インターネットの報道には嘘（うそ）や間違いが多いので、報道の内容を時系列に整理することで正しく情報の取捨選択をしなければ、大きな損失を出してしまうということ。
3　グローバル化した時代に生きる我々には、価値転倒により膨大な選択肢があるため、情報を読みこなすことに疲れてしまい無機質な反応しかできなくなるということ。
4　情報化社会においては、生きていく上で情報そのものが重要な価値をもち、既存の社会の価値観が転換されて物質的なものは価値を失い続けているということ。

問十　傍線部⑦「最初から想定している結論を確認して、考えることを放棄して安心する行為」とありますが、それは具体的にどのような行為ですか。「『いいね』」という言葉を必ず使い、三十字以内で答えなさい。

問十一　傍線部⑧「自分の物語でありながら自己幻想には直接結びつくことはない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　「批評」は自分の生い立ちに関わる出来事を起点にする場合もあるが、常に周囲の人たちの意見を参考にしながら客観性を保つよう意識するから。

2　「批評」は自分が大切にしているものを論じたものであるが、自分の価値観だけでなく他の多くの価値観も検討した上で結論付けたものだから。

3　「批評」は自分が想像している世界について論じたものであるが、想像にとどまらず現実のものになるよう世界に対して働きかける努力を惜しまないから。

4　「批評」は自分自身の興味関心を起点にする場合もあるが、自己についての語りではなく自分と世界とのかかわりについて表現したものだから。

問十二　次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に話し合っている場面です。本文の内容をふまえて、趣旨に最も近い発言を次の中から選び、番号で答えなさい。

1　生徒Ａ――筆者は「書く」ことの大切さについて論じているね。今は「読む」ことが非日常になってしまったけど、昔のように「読む」ことを取り戻していかないと、世の中に発信できるようなことを書けるようにはならないよね。

2　生徒Ｂ――そうかなぁ。筆者は「読む」ことから「書く」ことを覚えることは時代遅れだと言ってるよ。今は発信のための手段がたくさんあるのだから、「読む」ことを意識せずに、どんどん書いて発信すればいいんだよ。

3　生徒Ｃ――いや、「読む」ことは無視できないよ。そして、筆者が今の私たちに求めている「読む」ことは、本などのまとまった文章を読むことだけでなく、社会で問題になっていることの背景や原因などを「読む」ことも含まれていると思うよ。

4　生徒Ｄ――そのためにもＳＮＳなどのコメントをよく読んで発信することが大切だよね。ＳＮＳには不特定多数の人の意見が書かれているから、世の中の人がどんなことを考えているかはこれを見ればよくわかるよね。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【ここまでのあらすじ】
寛政大学の陸上競技部は、一年生の蔵原走、四年生でキャプテンの清瀬灰二、二年生で留学生のムサ・カマラら十名で箱根駅伝の予選会に出場した。結果発表を待ちながら、清瀬は故障している右脚を氷で冷やしている。

走はふと、清瀬の手もとを見た。クーラーボックスに入れて持ってきた氷が、ビニール袋のなかで溶けかかっている。

「氷をもらってきます。あそこの売店で、わけてもらえるかもしれない」

①重苦しい空気から逃れたくて、走は立ちあがった。ムサも同じ気持ちだったのだろう。

「私も行きます」

と言って、ついてきた。

芝生広場を横切り、赤い屋根の売店を目指す。予選通過を確信できた大学は、選手の表情ですぐわかる。緊迫感を漂わせているのは、寛政のようにボーダーライン上の大学だ。もっと下位であることが歴然としている大学は、総じて穏やかに結果発表を待っていた。なかには、女子マネージャーが作った重箱の弁当を、仲良くつついているチームもある。

いろいろだな、と走は思った。このひとたちにとっては、予選会に出る、ということが目標なんだ。最初から結果はわかりきっているから、走り終わったらピクニックと同じようなイベントにして、楽しんでしまう。それが悪いわけではないけれど、俺たちとはちがう。走はそう感じた。

俺は、予選会で終わるなんてごめんだ。もっと高みを見たい。もっと速く、強いチームになって、箱根駅伝で戦いたい。そのための練習をしてきたし、そのためならこれからも、もっと練習する気持ちがある。

「どうなるでしょうね、走」

ムサが心配そうに話しかけてきた。

「行けますよ、箱根に」

走は請(う)けあった。A熱いマグマが、腹の底に湧いてくる。今日だって全員が全力で予選会を走った。負けるわけがない。

力のこもった言葉に、ムサはI目を見開いた。

「走はなんだか、強くなったようです」

「そんなことはないですよ」

走は首を振った。「俺たち、けっこう頑張(がんば)って走ったじゃないですか。だから大丈夫だと思うだけで」

ムサはうなずいた。

「そうですね。私たちは箱根に行くのでした。みんなで」

ムサが言うと、おとぎ話の幸福な結末のようにも、信頼のおける予言のようにも聞こえるのだった。

走とムサが、「氷がほしい」と頼んだところ、売店の店員は快(こころよ)くわけてくれた。手ぶらで来てしまったので、店員は紙コップに氷を入れる。

「うっかりしていましたね」と話すムサの背後を、見物客の一団が通りかかった。

「また黒人選手がいる。Bずりいよなあ、留学生を入れるのは」

「あんなのがゴロゴロいたら、日本人選手はかないっこないもんな」

聞こえよがしな囁(ささや)きに、ムサはサッとII顔を強張(こわば)らせ、②走は振り返って抗議しようとした。

「いいんです、走」

③ムサが押しとどめる。「今日だけでも、ああいう意見をずいぶん耳にしました」

「あんな勝手なこと、言わせておけないですよ！」

走はなおも、遠ざかっていく見物客を追おうとしたが、ムサに腕をつかまれた。

「喧嘩(けんか)はいけません。あのひとたちが言っているのは、陸上の才能を見込まれてやってきた留学生のことでしょう。私は恥ずかしいです。自分が恥ずかしいです。彼らには区別がついていないようですが、私の足は速くない。やっかまれるほどの才能もない、ただの留学生だからです」

「そんなこと、関係ない！」

走は憤然とした。「ムサさんも、俺も、今日、一位と二位を取ったひとたちも、同じコースを走ったことには変わりないですよ。それをあんな……」

どう言っていいのかわからなかったが、走は悔しかった。ともに寝起きするムサも、自分自身も、会話を交わしたこともない他大学の留学生も、まとめて侮辱された気分だった。そうだ、うまく表現できないけれど、これは走りに真剣に向きあうものに対する侮辱だ。走は肩をいからせた。

「蔵原の言うとおりだな」

と声がした。振り向くと、頭をつるつるに丸めた、ひょろ長い男が立っていた。

「だが、放っておけ。あいつらは、走るってことがわかっていない素人だ」

男は走とムサが見ているまえで、売店でウーロン茶を買った。どこかで会ったことがある。走は警戒を解かないままに、あわただしく記憶を探った。この、よく光る頭には見覚えがあるぞ。

「六道大の藤岡！　……さん」

走は解答を導きだした。箱根で連続優勝している六道大。そのキャプテンの、藤岡一真だ。春の東体大記録会で顔を合わせたきりだが、どうしてこのひとが、予選会になんか来てるんだろう。

走の疑問を読み取ったのか、

「敵状視察だよ」

と藤岡は言った。「寛政大はずいぶん強くなったな。箱根まで出てきそうじゃないか」

藤岡には王者の余裕と貫禄があった。

「おかげさまで」

走は生来の負けん気が Ⅲ 頭をもたげ、昂然と答えた。藤岡は、一歩も引かぬ視線を走と激突させてから、ムサを見た。

「④ ああいう輩は、気にしないほうがいい。ばかげた意見だ」

「どういうところがですか」

茶を飲みながら去っていこうとする藤岡を、走は呼びとめた。見物客の、ムサへの言いぐさには腹が立つ。だが、どうして腹が立つのか、はっ

きりと把握できなかった。このもやもやの原因がどこにあるのか、藤岡はわかっているようだ。
「教えてください」
と走は頼んだ。藤岡は足を止め、おもしろそうに走を眺めた。「いいだろう」と、走とムサに向き直る。
「ばかげた部分は、少なくとも二つある。ひとつは、日本人選手が太刀打ちできないから、留学生をチームに入れるのはずるい、という理屈。じゃあオリンピックはどうするんだ。俺たちがやっているのは競技であって、お手々つないでワン・ツー・フィニッシュする幼稚園の運動会じゃない。身体能力に個人差があるのは、当然のこと。しかしそのうえでなおかつ、スポーツとは平等で公正なものなんだ。彼らは、同じ土俵で同じ競技を戦うとはどういうことかを、まったくわかっていない」
ムサは黙って、藤岡の言葉に聞き入っている。走は、静かに繰りだされる藤岡の分析に、ただ圧倒されていた。
「彼らのもうひとつの勘違いは、勝てばいいと思っているところだ」
と、藤岡はつづけた。「日本人選手が一位になれば、金メダルを取れば、それでいいのか？　断固としてちがうと、俺は確信している。競技の本質は、そんなところにはないはずだ。たとえ俺が一位になったとしても、自分に負けたと感じれば、それは勝利ではない。タイムや順位など、試合ごとにめまぐるしく入れ替わるんだ。世界で一番だと、だれが決める。そんなものではなく、変わらない理想や目標が自分のなかにあるからこそ、俺たちは走りつづけるんじゃないのか」
そうだ。走は、もやもやが晴れていくのを感じた。こういうことに、俺は引っかかり、怒りを覚えたんだ。藤岡はすごい。走の感じたこと、言いたかったことを、いともたやすく解きほぐして言葉にしてしまった。
「あいかわらずだね、藤岡」
と声がした。いつのまにか清瀬が、走とムサの背後に立っていた。
「部外者が余計なことを言った」
藤岡はストイックな態度で清瀬に一礼し、今度こそ去っていく。
「いいや、助かるよ」
清瀬が言うと、藤岡は肩越しに振り返り、口の端に笑みを浮かべた。
「なかなかの人材をそろえたようじゃないか」

「まあね」
「箱根で待つ」
最後まで、王者にふさわしい毅然(きぜん)とした態度で、藤岡は木々のあいだに消えていった。涅槃(ねはん)で待つ、みたいだなとか、ここまで来たのに結果発表は見ていかないのかな、などと走は思ったが、あわてて藤岡の背中に向けて頭を下げる。ムサも、「ありがとうございます」と言って深々とお辞儀(じぎ)をした。C雷雲を払うような⑤藤岡の言葉が、走とムサに活力を抱かせた。
「袋も持たずに行ってしまうから、追ってきた」
清瀬はビニール袋を掲げてみせた。走は「すみません」と受け取り、店員からもらった氷を袋に移す。清瀬はもう、脚を引きずることなく歩いている。
「藤岡さんというのですか。すごいかたですね」
とムサは感激したふうだ。
「箱根で勝ちつづけるには、精神力と本当の意味でのかしこさが必要だってことだろう」
清瀬はちょっと笑った。「まあ、あいつは昔っから、妙に落ち着いてたけどね。あだ名が『修行僧(しゅぎょう)』の高校生って、ちょっといやだろ」
走とムサは顔を見合わせ、たしかに、とうなずいた。
ゴール地点近くの大きな掲示板に、見物客や選手たちが集まりはじめている。
「そろそろ発表だな」
「行きましょう」
ムサは小走りになって、寛政大の陣地へ戻る。走は清瀬のペースに合わせ、ゆっくりと芝生を踏みしめた。どんな結果が出るか気になるが、ここまで来てあがいても、もうどうにもならない。それよりもいま、走の心を占(し)めているのは、藤岡の姿だった。
思いを言葉にかえる力。自分のなかの迷いや怒りや恐れを、冷静に分析する目。
藤岡は強い。走りのスピードも並ではないが、それを支える精神力がすごい。俺がただがむしゃらに走っているときに、きっと藤岡は目まぐるしく脳内で自分を分析し、もっと深く高い次元で走りを追求していたのだろう。
走はうちひしがれると同時に奮(ふる)い立つという、奇妙な興奮を味わった。

俺に欠けていたのは、言葉だ。もやもやを、もやもやしたまま放っておくばかりだった。でも、これからはそれじゃあだめだ。藤岡のように、いや、藤岡よりも速くなる。そのためには、⑥走る自分を知らなければ。

それがきっと、清瀬の言う強さだ。

「俺、わかってきたような気がします」

走はぽつりと言った。

「そうか」

清瀬は満足そうだった。

（三浦　しをん『風が強く吹いている』から）

問一　波線部Ⅰ～Ⅲの本文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

Ⅰ　目を見開いた

1　意外な状況の展開に対して驚くこと。
2　相手の気迫に恐怖を感じること。
3　だんだん嬉しくなってくること。
4　今までとの違いに戸惑うこと。

Ⅱ　顔を強張らせ

1　突然の変化に直面して気があせること。
2　我慢してきた怒りがあふれそうになること。
3　強い衝撃によって涙が出そうになること。
4　緊張して思わず表情が固くなること。

Ⅲ　頭をもたげ

1　強がっていた気持ちが急激に弱まること。
2　隠れていた気持ちが浮かび上がってくること。
3　未知の相手への敵対心が芽生えてくること。
4　少しずつ自分に自信がみなぎってくること。

問二　二重傍線部A「熱いマグマが、腹の底に湧いてくる」、B「ずりぃよなあ、留学生を入れるのは」、C「雷雲を払うような」に用いられている修辞法として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

1　直喩　　2　隠喩　　3　倒置法　　4　反復法

問三　傍線部①「重苦しい空気」とありますが、部員たちの様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　信頼の厚いキャプテンである清瀬の右脚の故障が心配で、予選を通過することよりもそのことに思いを寄せている。
2　自分たちのタイムが予選を通過できるかどうかの当落線上にいるため、部員たちの間に緊張感が張り詰めている。
3　予選の結果発表を待っている緊迫した状態のなかで、思い通りの走りができなかったことを後悔している。
4　他大学の選手たちが穏やかな表情で予選通過を確信している一方で、自分たちの予選通過は難しいと考えている。

問四　傍線部②「走は振り返って抗議しようとした」とありますが、この時に見物客の一団の発言から走が感じ取ったものは何ですか。それが示された部分を本文中から十八字で抜き出し、**最初の**五字を答えなさい。

問五　傍線部③「ムサが押しとどめる」とありますが、ムサがこのような行動を取った理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　見物客たちの指摘は当然のことだと考え、感情的に言い争っても自分たちに勝ち目はないと判断したから。
2　自分とは違う外国人選手の話だと考えており、自分には全く関係のない話だと気に留めていなかったから。
3　自分のことで他のチームと争うことになり、その結果、走やチームメートに迷惑がかかると考えたから。
4　他の外国人選手と比べて、自分には周囲に認められる実力がないと考え、情けない気持ちになっているから。

問六　傍線部④「ああいう輩」とありますが、どのような人のことですか。それが示された部分を本文中から十六字で抜き出し、**最初の**五字を答えなさい。

問七　傍線部⑤「藤岡の言葉が、走とムサに活力を抱かせた」とありますが、二人が活力を抱いたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　身体能力には個人差があるという現実を受け入れた上で、一つの競技を同じ規則や場所で行う条件の下、他人との比較ではなく自分の持つ目標や理想を追求することが競技の本質であることを悟ったから。

2　それぞれの才能や成長の速度には個人差があるという不平等をあらかじめふまえた上で、それでもなお同じ条件の下、他の選手と競い合うことを通して自分を高めることが競技の本質であることを知ったから。

3　どれだけ努力を重ねたとしても自分の可能性には限界があるという現実を受け入れた上で、同じ環境の下、自分以上の才能を持つ選手たちと競い合い、勝ちにこだわることが競技の本質であると気づいたから。

4　順位とは生まれながらにして持っている才能の差によってつくという不条理をふまえた上で、同じ規則や環境の下、各人が持つ理想や目標に向かって積み重ねていくことが競技の本質であると分かったから。

問八　傍線部⑥「走る自分を知らなければ」とありますが、走はなぜこのように感じたのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　藤岡の言葉の端々から頭の良さを感じ、これまでただがむしゃらに走ってきただけの自分は勉強不足で、走ることの分析について何も行っていなかったと感じたから。

2　藤岡の話を聞きながら、走るということについてきちんと考えないまま競技を続けていた自分に気づき、このままでは箱根駅伝で良い成績を残せないと感じたから。

3　藤岡の強さの原因を知り、うちひしがれると共に奇妙な興奮を味わうことで、自分の中の思いを冷静に分析し、その思いを言葉にかえる必要を感じたから。

4　藤岡の深い分析力を目（ま）の当たりにして、自分も体幹や練習量の観点から「走る自分」を客観的に理解しなければならないと感じたから。

問九　この文章の構成や表現の特徴を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　登場人物の立場や考えが分かりやすく把握できるように、回想場面を多く用いた構成がとられているため、部員一人ひとりのつらい過去までも読み取ることができる。

2　三人称の視点から登場人物を客観的に描いているが、走の心情が要所で描かれているため、読み手が走の視点に重ね合わせながら作品を読み進めていくことができる。

3　自分の思いを上手に伝えることができず、他人と円滑なコミュニケーションを取れない走が、陸上競技を通して多くの人々と交流する中で、大きく成長を遂げていく様子が描かれている。

4　陸上競技に対してひたむきに打ち込む大学生たちの悩みや苦しみ、さらに、どうすれば速く走れるのかという問いに明確な答えを出す過程を、心情の推移と共に描く構成がとられている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中比(注1)の事にや、山より下りける僧ありけり。糺(注2)の前の河原を過ぐるに、幼き童部三人、おのおのいみじく争ひ論ずる事あり。此の僧、立ちとどまりて、其の故を問ふ。童の云ふやう、「ここに、Ⅰおぼつかなき事侍り。神の御前にて、まづ、人のよみ給ふ経の名をさまざまに申して、『我こそよく云へ』と、(注3)Ⅱかたみに論じ侍るなり」と云ふ。

をかしと思ひて、ひとりづつ、①これを問へば、一人は［　X　］経と云ひ、一人は［　Y　］経と云ひ、一人は［　Z　］経と云ふ。僧、うち笑ひ、「これは、皆ひがことぞ(注4)。心経とこそ云へ」と云へば、云ひやみて、皆去りぬ。

かくて一町(注5)ばかり行く程に、河原中に、俄に②(注6)まくれて倒れぬ。③夢のごとくして臥したる程に、やむごとなき人(注7)、枕に来たりてのたまふやう、「汝がしわざ、心得ず(注8)。此の幼き者の云ふこと、皆そのいはれあり。［　X　］経と云ふ、ひがことにあらず、実の法なれば。［　Y　］経と云ふ、又ひがことにあらず、いはれ深きことわりなれば。［　Z　］経と云ふもたがはず、神明の、Ⅲことにめで(注9)給ふ経なれば。此の事をやや久しく論じつれば、とにもかくにもめでたく聞きつるを、汝が事をきれ(注10)る故に、④云ひやみて去りぬ。口惜しければ、其の事示さんとてなり」と仰せらるると見て、汗うち流れあえて、ことなくなむ起きたりける。神の法をめで(注11)給ふ御志、深げにあはれなる事なり。

（『発心集』から）

（注）
1　中比 ―――― そう遠くない昔。
2　糺 ―――― 糺神社。
3　我こそよく云へ ―――― 私の言うのが正しい。
4　ひがこと ―――― 誤り。

5　一町　――――「町」は距離の単位。一町は約一〇九メートル。
6　まくれて　――――目がくらんで。
7　やむごとなき人　――――高貴な人。
8　心得ず　――――心外である。
9　めで給ふ　――――重んじなさる。
10　きれる　――――判定した。
11　法　――――仏法。

問一　二重傍線部「のたまふやう」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二　波線部Ⅰ～Ⅲの口語訳として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

Ⅰ　おぼつかなき事

1　うれしいこと
2　腹の立つこと
3　気がかりなこと
4　覚えられないこと

Ⅱ　かたみに

1　互いに
2　かたくなに
3　一方的に
4　難しそうに

Ⅲ　ことに

1　更（さら）に
2　変に
3　急に
4　特に

問三　傍線部①「これ」の指している内容は何ですか。最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　子どもたちの名　2　神仏の名　3　経の名　4　今いる土地の名

問四　空欄 X ～ Z に入るものとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

1　心　2　深　3　実　4　神　5　真　6　僧

問五　傍線部②「まくれて倒れぬ」とありますが、僧侶が倒れたのは神がどうしようとしたからですか。最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　子どもたちの議論がけんかに発展しそうで心配だったが、僧侶が仲裁に入ったおかげで解決したので、感謝を伝えようとしたから。

2　子どもたちの議論を好意的に聞いていたのに、僧侶によって議論が打ち切られてしまったため、自分の考えを知らせようとしたから。

3　子どもたちの議論にすっかり夢中になってしまい、僧侶が神仏に捧げる経を読むのを忘れてしまったため、怒りを伝えようとしたから。

4　子どもたちの議論を興味深く見守っていたが、僧侶が子どもたちに間違ったことを教えたのを目にし、僧侶をこらしめようとしたから。

問六　傍線部③「夢のごとく」とありますが、僧侶が見た夢の内容は「やむごとなき人」からどこまでですか。**最後の**五字を抜き出しなさい。

問七　傍線部④「云ひやみて去りぬ」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　経の名について言い争っていた子どもたちに対して、僧侶が自分の考える経の名を告げたから。
2　子どもたちが経の名を神に尋ねていたのに対して、僧侶が余計な口出しをしてしまったから。
3　経の名がわからない子どもたちに対して、僧侶がそれはおかしいと言って笑いものにしたから。
4　子どもたちが経の名を言い争っていたのに対して、僧侶が言い争いは良くないと止めたから。

問八　本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1　僧侶は子どもたちが議論することを予知夢として見ていたので、彼らを探して山から下りてきた。
2　僧侶は神からありがたい指摘を受けたことで、自分が三人の子どもに会うのが運命だったと確信した。
3　神は神社の前で交(か)わされる議論に聞き入り、三人の子どもが述べる意見それぞれが正しいと思った。
4　神は人々の厚い信仰心に感じ入り、三人の子どもと僧侶に、仏法とは何かを教えるために現れた。